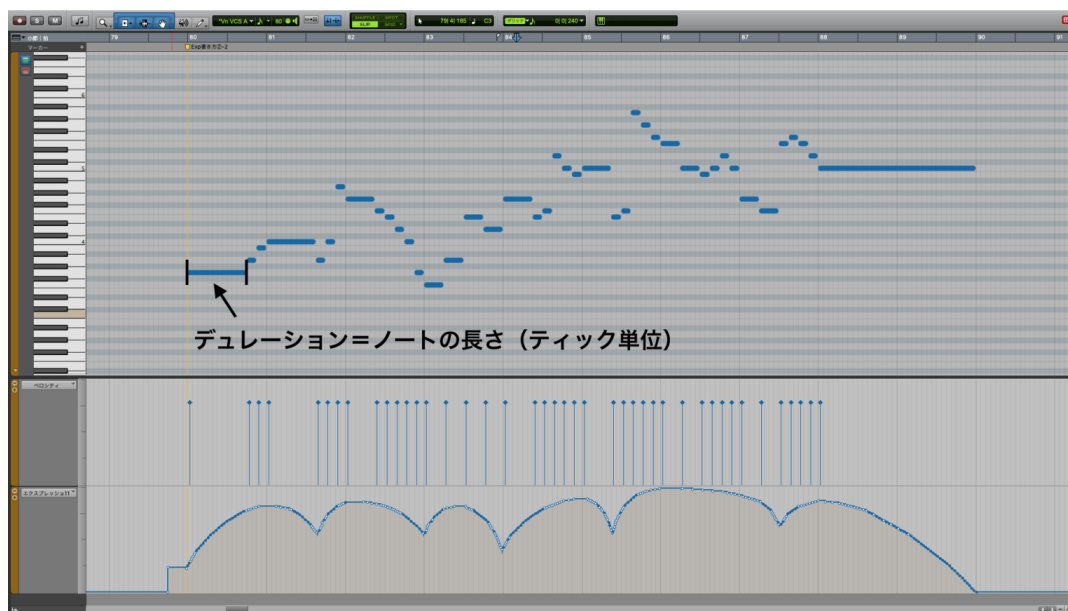


3-3 スtringsの デューレーション

② デュレーション

ノート(音)の長さのこと。正確には、ノートオンからノートオフまでの長さを表すパラメータ。同じく音の長さを表す言葉に「音価」があるが、「音価」はあくまで楽譜上に書き表すことのできる音の長さであるのに対して、「デュレーション」は楽譜では表現しきれないような細かい長さを「ティック」単位で指定できるのが特徴。



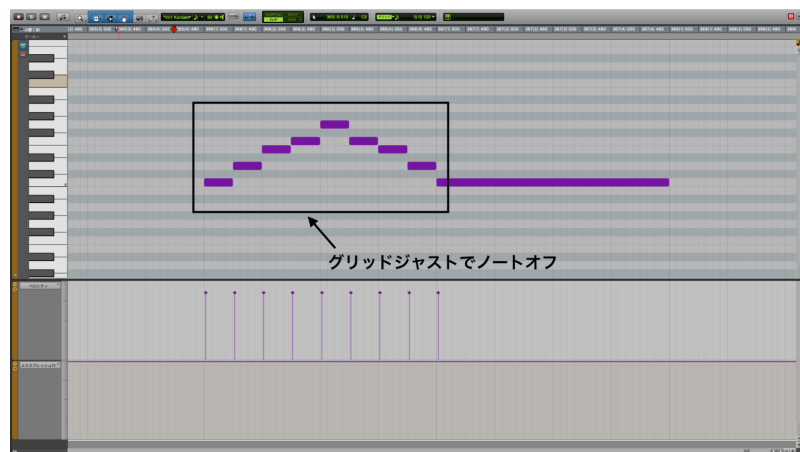
デュレーションのもたらす効果

- ① レガート感(滑らかさ)
- ② 歯切れの良さ
- ③ グルーヴ感

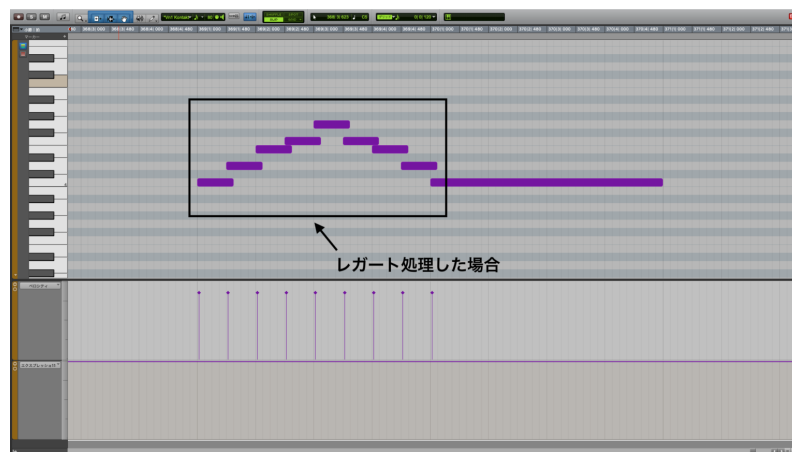
デュレーションのもたらす効果①:レガート感(滑らかさ)

レガート感は、ストリングスのデュレーションコントロールで最も重要な要素。フレーズを滑らかにつなげて演奏する「レガート」や「スラー」といった奏法の実現には、デュレーションのコントロールが欠かせない。

■ デュレーション未調整



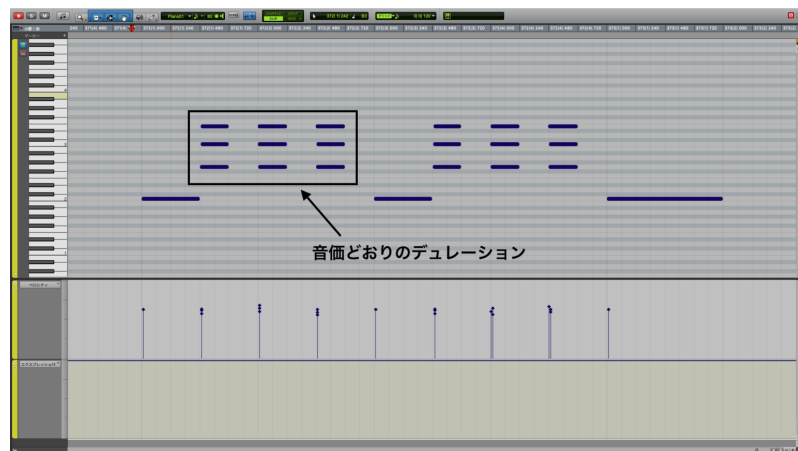
■ デュレーション調整後



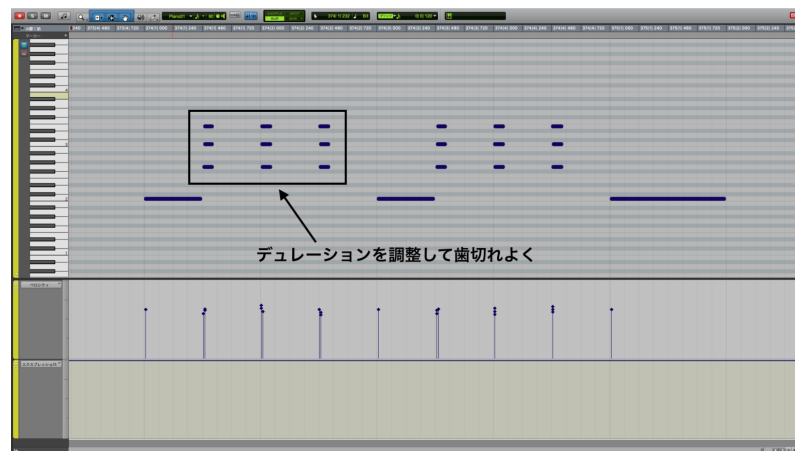
デュレーションのもたらす効果②: 歯切れの良さ

デュレーションのコントロールは演奏の歯切れの良さにも影響する。とくにピアノのスタッカートなどでは顕著に現れる部分なので、丁寧にエディットしよう。

■ デュレーション未調整



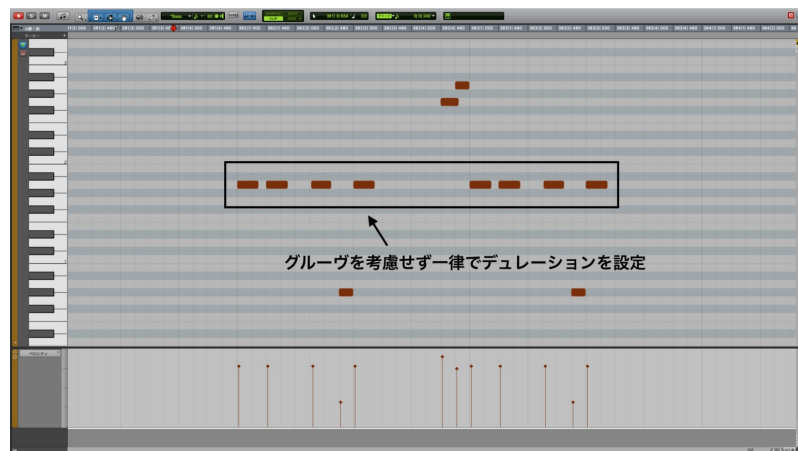
■ デュレーション調整後



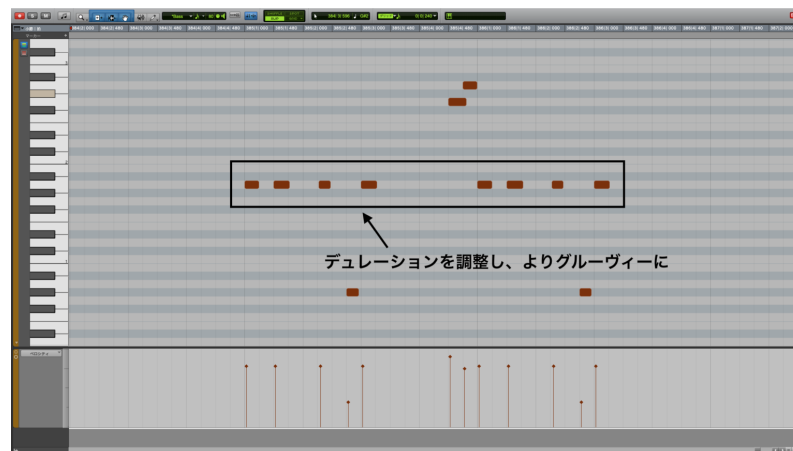
デュレーションのもたらす効果③: グルーヴ感

グルーヴ感というと、クオンタイズなどの「発音タイミング」にばかり目が向きがちだが、デュレーションもグルーヴを司る大事な要素。とくにベースのデュレーションは楽曲全体のグルーヴに大きく作用するため、丁寧にエディットしたい。

■ デュレーション未調整



■ デュレーション調整後



ストリングスの デュレーション設定方法

レガート処理の重要性

ストリングスにおけるデュレーションのエディットは、「いかにして自然なレガートを実現するか？」に尽きる。

一般的なストリングス音源では、ロングノート系の音色の立ち上がりが遅く、グリッドジャストでノートオフしてしまうと、先行するノートと後続のノートの間にわずかな隙間が空いて聞こえるため、音が切れ切れに聞こえてしまう。

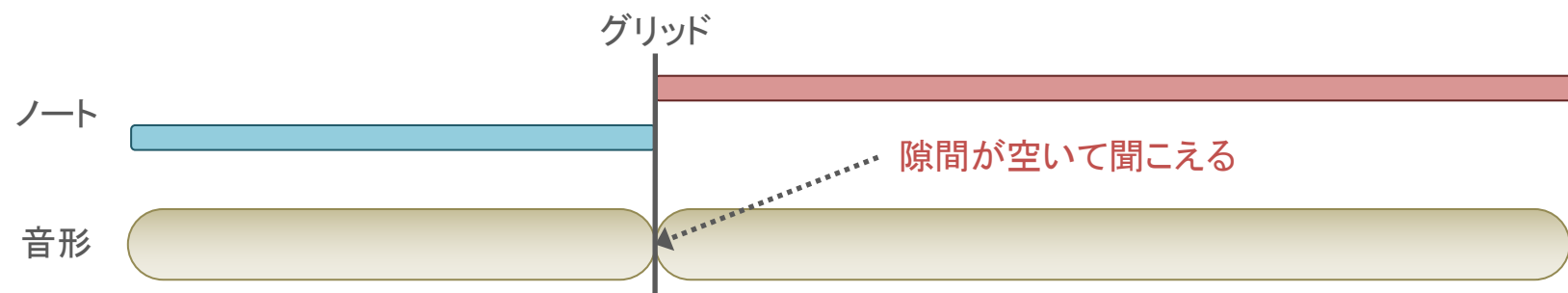
それを解決するためには、先行するノートのデュレーションを伸ばし、次の音にかぶせるとよい。(これをレガート処理という。)

先行するノートのお尻と、次の音の頭がちょうどよくかぶさることで、滑らかにつながった演奏に聞こえる。

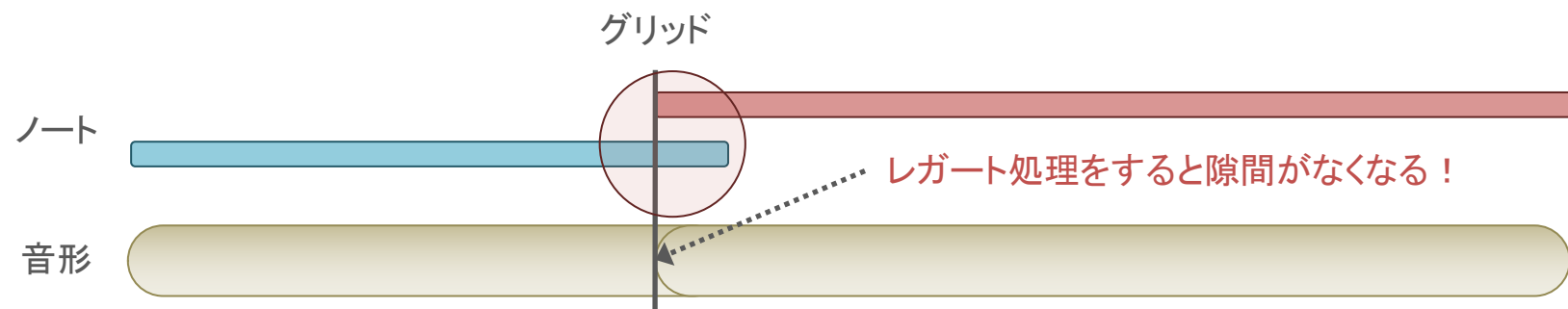
ノートやフレーズごとにデュレーションを設定することはもちろん、トラック全体を一括でレガート処理することもできるので覚えておこう。

レガート処理の重要性

【グリッドジャストでノートオフした場合】



【レガート処理を施した場合】



レガート専用音色も積極的に利用しよう

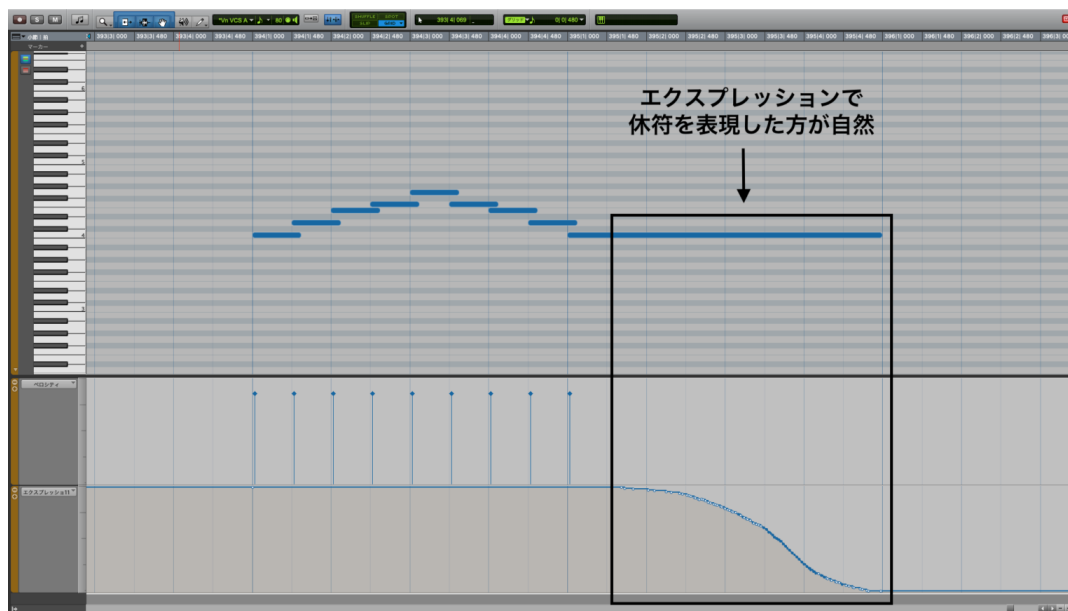
比較的高価なストリングス音源では、リアルなレガートを再現してくれる専用の音色が用意されている。そのような音色は、音と音の切り替わりが個別にサンプリングされているため、単に音の末端を重ね合わせるだけよりもリアルなレガート感を得ることができる。

【レガート専用音色を持つ代表的な音源】

- Vienna Symphonic Library(通称VSL)
- EastWest Hollywood Strings
- Spitfire Audioの各種ストリングス音源
- Cinematic Studio Strings(通称CSS)
- Cinestings
- 8dioの各種ストリングス音源
- etc...

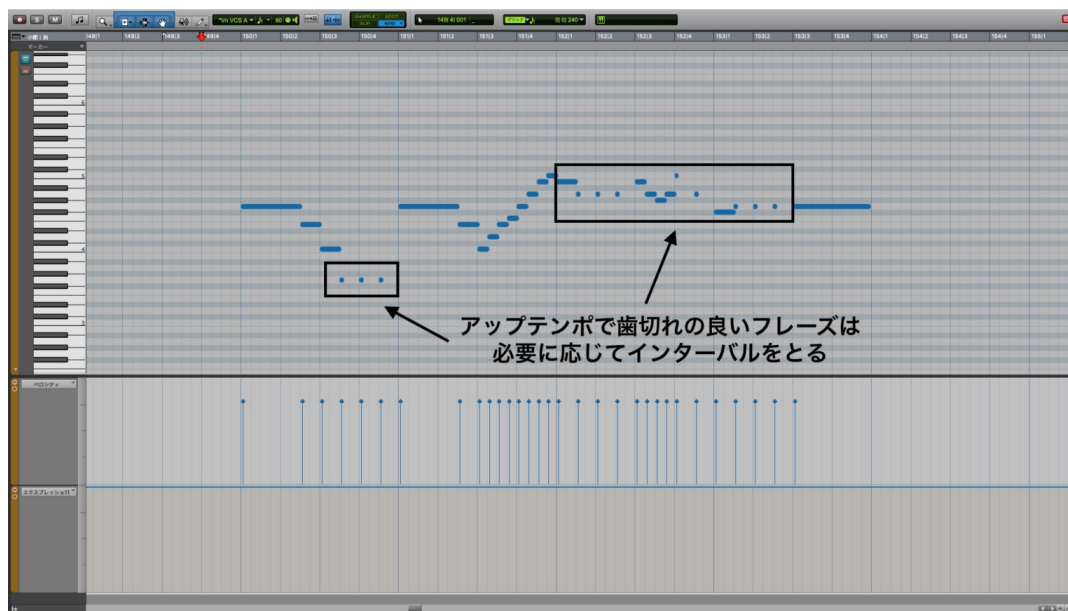
グリッドジャストでノートオフする場合

あえてグリッドジャストでノートオフすることで、フレーズの終了感を演出するのもアリ。(楽譜上でフレーズの最後に休符が入るような場合に有効)MIDI上では休符を設けず音を最後まで伸ばした上で、グリッドジャストでノートオフ。エクスプレッションで音を切るとよい。



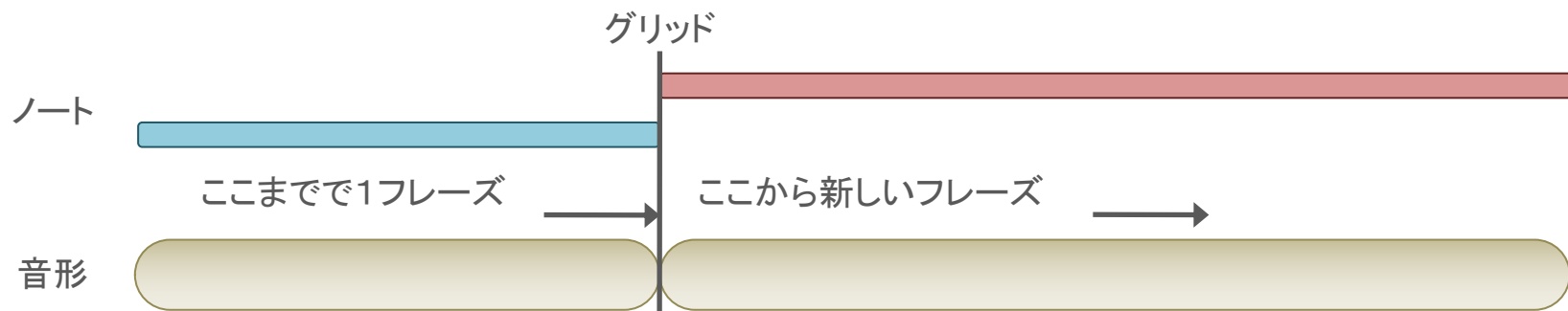
インターバルを取る場合

連続するノート間でスキマを設けることをインターバルという。ストリングスアレンジにおいては、アップテンポな歯切れの良いパッセージを演奏させる際に、インターバルを取りながら演奏すると自然な演奏になる。



グリッドジャストとインターバル

【あえてグリッドジャストで打ち込むと・・・？】



【インターバルを取った場合】

